

《シンポジウム》

2019 年度シンポジウム司会報告

司会 松村 良祐

上述の〈企画の趣旨〉に示されたように、2019 年度のシンポジウムにおいては「教父時代における枢要徳の受容と形成」を課題とし、古代ギリシアから初期キリスト教へと至る枢要徳思想の受容と形成の過程を考察することが企図された。枢要徳は信仰・希望・愛徳という対神徳とともに、人間がキリスト者として目指すべき人間像を中世において定位させたと理解されることが多い。しかし、枢要徳の取り扱いを巡っては、中世盛期に注目が集まる一方で、古代末期から中世初期におけるその受容の具体的な経緯は、それほど扱われてこなかったように思われる。そこで、今年度のシンポジウムでは、古代ギリシアにおける枢要徳概念の源泉に注目するとともに、アレクサンドリアのクレメンス、アンブロシウス、アウグスティヌスの三者に焦点を当て、彼らのテキストを最新の研究成果を織り込みながら具体的に読み解いていくことで、古代末期における枢要徳の受容と理論化に関する新鮮かつ多様な視点を提供することを目指した。

まず、秋山学氏による第一提題「アレクサンドリアのクレメンスにおける徳」では賢慮 (φρόνησις) を中心としてクレメンスの徳論が取り扱われた。クレメンスにおいて至高の目標である覚知は賢慮にその基礎を持つものとして理解され、覚知者に備わる諸徳の特性は「焼き尽くす献げ物 (レビ 5.10)」や「智慧の霊 (出エジプト 28.3)」といった旧約的な諸概念との関わりの中で規定されている。古代ギリシアやストアの徳論を聖書概念、特に旧約的な諸概念をもとに整備するクレメンスの内には、古代ギリシアに起源を有する枢要徳がキリスト教世界において受容され、新たな装いを伴って理論化されていく基礎的なプロセスを認めることができる。

次に、山田庄太郎氏による第二提題「アンブロシウスにおける枢要徳——キケロの影響とアンブロシウスの独自性」では、アンブロシウスの

『教役者の義務について』が取り上げられた。アンブロシウスの『教役者の義務について』は、キケロの同名の書『義務について』をモデルとし、ギリシアの主要な諸徳の概念規定においてキケロと重なりを見せながらも、そのコンテクストと向かう方向を異にする。「正義の基礎は fides である」というキケロの言葉はアンブロシウスにも見出されるものであるが、アンブロシウスにおいて、この言葉はキケロのように人間同士の「信義 (fides)」に関わるものではなく、神に対する「信仰 (fides)」に関わるものとして換骨奪胎されて用いられ、正義や他の諸徳は信仰という基礎の上に成立することになる。山田氏の提題を通じて、枢要徳を巡る古代の哲学的伝統を受容しつつも、新たなキリスト教倫理を模索する先駆者としてアウグスティヌスの前に立つアンブロシウスの位置付けが鮮明にされたように思われる。

これを受けて最後に、菊地伸二氏による第三提題「アウグスティヌスにおける枢要徳の問題」では、『カトリック教会の道徳』と『神の国』という初期と後期の二篇のテキストが中心に取り扱われ、枢要徳を巡るその位置付けの相違が示された。『カトリック教会の道徳』におけるアウグスティヌスの枢要徳理解の特徴は、神への愛を根底に置き、その様々に異なった発現として枢要徳を理解する点にある。枢要徳に関する哲学的伝統を自覚的に受け入れながらも、キリスト教的な視点からそれに基礎づけを与えようとするアウグスティヌスの姿勢はアンブロシウスとも共通するものであるが、菊地氏は『神の国』をはじめとする後期著作においては、人間が至福な生へと至るための枢要徳の重要性が示唆されつつも、真の幸福や見神といった来世的な視点がより先鋭化され、その重要性の限定される側面がアウグスティヌスの内に生じてきていることを指摘している。

こうした三者の提題によって、古代ギリシア・ローマの哲学的伝統と交錯する古代末期の状況下で、それまでの哲学的伝統に対する肯定と否定を通じて枢要徳にキリスト教的な基礎づけを与えようとする個々の思想家の試みを確認することができたように思われる。フロアからも、それらの徳目を通じて個々の思想家が捉える人間の究極目標や枢要徳の徳目の中での主要な徳についての理解の相違、或いは恩寵や義化、対神徳との関係を踏まえた上での人間の完全性の理解などについて相次いで質問が出され、活発な議論が行われた。

もっとも、人間の本性をどのように理解するかは時代や地域によっても様々であり、それによって習得すべき徳の理解にも相違が見出だされる。

土橋茂樹氏の連動報告「『枢要徳』概念の源泉と変容」はこの問題を取り上げるものであり、土橋氏は古代における四徳に関する基本理論を別出した上で、プラトン主義やフィロン、プレトンらを手掛かりとして、それを受容する地域や時代、ないしは人間観の相違によって、神を目指す階層性や個々の伝統との混淆といった仕方様々に変容を遂げながらも存続する枢要徳の姿を描き出している。そして、こうした個々の理路に基づいて変容を被りつつも、人間本性の完成として共有され、理解し合える性格類型を提供したことが思想上において「枢要徳」概念の持つものではなかったかと結論される。

ところで、こうした人間本性の完成としての枢要徳の在り方がその後問題として取り上げられるのが13世紀であり、その背後には、都市や大学の興隆、『ニコマコス倫理学』をはじめとするアリストテレス著作の本格的受容といった急激に変化する13世紀の組織的・社会的状況のもとで徳の理想に関する規範的合意を再考する必要があったと考えられる。実際、アリストテレスにおいて枢要徳の徳目は数ある徳のひとつであり、それらは必ずしも中心的な位置を占めているわけではない。そして、中世の人々は自分たちがそれまでに慣れ親しんできたものとは異質なアリストテレスの倫理体系と出会うことで、4つの徳が枢要徳と言われるその意味やその数の必然性を問い直し、枢要徳と再び向き合うことを余儀なくされたわけである。そこで、アクィナス、ボナヴェントゥラ、スコトゥスに焦点を当て、こうした「スコラ学における枢要徳の発展」を課題として担うのが2020年度のシンポジウムである。